
2025 年度ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～
おうちづくり 自分たちが入れるおうちを作りたい



社会福祉法人 檸檬会 レイモンド下高井戸保育園

目次

I.はじめに	- 1 -
○当園について	- 1 -
○私たちの考える科学する心	- 1 -
○おうちづくりのはじまり	- 1 -
II.実践報告	- 2 -
○子どもたちとおうちについて知っていることを話す	- 2 -
○子どもたちが興味を示したのは、おうちづくりに関係する仕事	- 3 -
○「自分たちが入れるおうちを作りたい」	- 4 -
○実際におうちを作るにあたって、共通のイメージを持つ	- 5 -
○おうちづくりをする人におうちの作り方を聞く	- 6 -
○友だちと協力しておうちを作る	- 9 -
○おうち完成のお祝いと、協力してくれた人に感謝を伝えるパーティーをする	- 13 -
○おうちづくりの振り返り	- 14 -
III.まとめ	- 15 -
○保育者が意識したこと、考察	- 15 -
○考察に基づく課題と今後の方向性や計画	- 15 -

I.はじめに

○当園について

当園は、社会福祉法人檸檬会が運営するレイモンド下高井戸保育園である。認可保育園で2019年4月に開園した。園庭はないが、園周辺には神田川が流れる閑静な住宅地にある。建物は明るく開放感があり、木のぬくもりあふれる家庭的な空間で、子どもたちはのびのびと暮らしている。

3歳以上の幼児クラスでは“異年齢保育”を行っており、思いやりの心を育てている。また、子どもの遊びのなかにある“なんだろう”という探究心を子どもが世界とつながる扉と考え、その扉を開けて踏み出し進んでいけるように、私たち保育者は“なんだろう”のその先へ子どもたちを導く存在でありたいと考えている。

○私たちの考える科学する心

子どもたちが“なんだろう”と疑問を持ち、自分で考えたり確かめたりし、時には失敗を経験しながらも新たな気づきや学びを繰り返す“探究心”を科学する心と捉えている。

そのために保育者は子どもの心の揺れ動く瞬間を見逃さないよう保育をしている。子どもたちが興味関心から抱いた“なんだろう”という疑問や呟きを拾い、子どもたちが自ら確かめたいくなるような関わりと環境構成を行っている。また、自分にはなかった新たな気づきや学びを得られるように子ども同士や大人との対話を重ねている。子どもたちが日常的に探究心を育むことのできるような保育を実践している。

本論文では、子どもたちが多くの「なんだろう」という疑問を抱き、自ら確かめようとする姿や、実際の経験を通して気づきや学びを得る姿について述べている。

○おうちづくりのはじまり

今回紹介する事例はすべて5歳児クラスの子どもたち15名（途中入園あり）と保育者、保護者、地域の協力者によって約1年半という長い期間で行われた実践である。

子どもたちのおうちづくりは意外なことから始まった。

ある時、子どもたちがモールで人形を作っていた。しかし、その人形を片付けずに出っぱなしにする子が多かった。そこで、保育者は人形を片付ける用のドールハウスを段ボールで作った。すると、子どもたちは段ボールで作ったドールハウスに興味を持ち、「私もドールハウス作りたい」と話し、ドールハウスづくりが始まった。

“ドールハウスを作ることを楽しむ” “ドールハウスを何度もリフォームすることを楽しむ” “ドールハウスで人形遊びを楽しむ”などと、子どもたちは各々好きな遊び方を楽しんでいた。

このことをきっかけに、“おうちづくり”をテーマとして長期間にわたり、子どもたちの遊びが深まり広がっていく様子を研究することにした。さらに、研究を通して子どもたちの連続性を持った遊びへの理解を深めていくことを目指した。（令和4年6月 当時4歳児クラス）



子どもが作ったドールハウス



ドールハウスで遊ぶ様子



ドールハウスを作る様子

Ⅱ.実践報告

○子どもたちとおうちについて知っていることを話す

この時点でドールハウスづくりが盛り上がり、5歳児クラスの全員が自らドールハウスを作り、所持していた。まずは、子どもたちの“おうち”についての興味がどこにあるのかを知る必要があると考え、サークルタイムにて「おうちについてどんなことを知っている?」と問いかけ、子どもたちの言葉を一つひとつウェブマップに書き留めていった。

まずはおうちのなかにあるものを次々と話す子どもたち。「鍋」「椅子」「本棚」自分の家にあるものをイメージしながら話していく。そして、「壁」「床」「屋根」「鉄」「ネジ」とおうちを構成するものや部品の名前が出てきた。

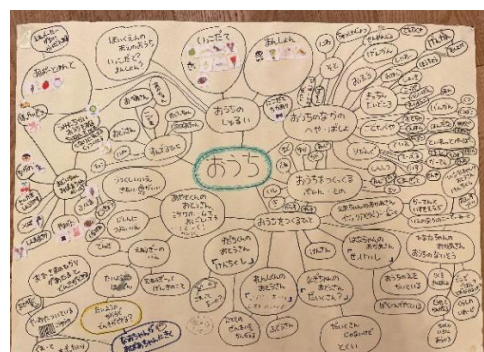
そこで、保育者が「壁や、ネジを使っておうちを作るのって誰なんだろう?」「おうちってどうやってつくるのだろう?」と子どもたちに疑問を投げかける。この頃、保護者が保育に参加する行事の最中であり、保護者の方に自己紹介を求める際に仕事についての質問をしていたこともあり、「Nちゃんのパパじゃない?」「Hちゃんのお母さんおうちの絵を描くお仕事してるよ」「僕のお父さんは〇〇(会社名)で仕事してるよ」とおうちに関する仕事をしていた保護者の名前が出てきた。「何ていうお仕事なんだろう?」「どんなおうちを作っているのだろう?」「建築士って言っていたけどそれってなんだろう?」疑問からさらに疑問が生まれ、子どもたちの知りたいという気持ちが高まっていった。(令和5年8月)

〈考察〉

保育者は子どもたちの発言をすべてを文字にし、この日に限らず、日常的にウェブマップに書いていった。すると、子どもたちは自分の思いが可視化されたことで「自分の言葉をもっと書いてほしい」という気持ちから、思いついたことを自ら保育者に伝えに來たり、子どもがウェブマップを読んで振り返ったりする様子が増えていった。日々更新されることで、新たな問いや気づきが生まれ、子どもたちの興味が続くとともに、自分の意見が肯定される経験を繰り返すことで、子どもたちの自己肯定感が高まっていくのを感じた。自分の気持



おうちについてサークルタイムで話す



おうちに関するウェブマップ

ちや意見が否定されない安心できる空間をつくることで、子どもたちの発言が増えていく結果となった。

○子どもたちが興味を示したのは、おうちづくりに関係する仕事

保育者は、おうちに関する仕事を調べ、建築士や大工、設計士など、職業についてのイラストと説明が書かれたポスターを作り、ウェブマップやドキュメンテーションと一緒に保護者にも見える場所に掲示した。

また、その仕事をしている保護者の写真をポスターに貼ったことで、子どもたちが「A 君のパパ、お仕事の時ヘルメット被ってる?」「K さんに聞いてみたい」「この人が持っている道具はなんだろう? H ちゃんのお母さん知っているかな?」と、おうちに関しての疑問をお迎えの際に該当する仕事の保護者に聞きに行ったり、おうち作りに関してアドバイスをもらったりする姿が増えていった。

疑問を持ったらすぐに聞きに行けることから、子どもたちの興味関心がより一層深まり、連続性を持って行った。

また、「実は私、前の仕事はインテリアコーディネーターだったんです。」と保護者から話しかけてくれることや、「何か手伝えることがありますか?」と協力的な保護者が増えていった。(令和5年8月)



おうちに関する仕事のポスター



ポスターを見る保護者

○おうちについて探究活動をする

おうちを作ることや、おうちづくりに関係する仕事に興味を持ちった子どもたちが、自ら探究活動が出来るように保育室内におうちに関するプロジェクトコーナーを設けた。大工道具図鑑、世界の建築物などの専門的な本や、家具店のカタログを設置した。また、設計の仕事をする保護者の方からもらった図面や、図面を描くのに使う T 定規という専門道具を設置し、図面を描ける作業スペースや、絵本やカタログを通しておうちについてさらに詳しく知ることが出来る環境構成を行った。

日々、子どもたちの興味の広がりに合わせて、さらに発展していく形を考え、アップデートし続けていった。結果、子どもたちが自分の興味がある部分の探究活動を自ら行っていった。



専門的な本やカタログの設置 設計図やウェブマップの掲示



設計図を描く様子

子どもたちの探究活動は園内だけでなく、戸外でも展開された。たとえば、「お祖母ちゃんの家にソーラーパネルがあるんだよ」という N ちゃんの言葉をきっかけに、子どもたちと一緒にソーラーパネルが設置されている屋根を見に行ったり、園周辺で行われているおうちの建設現場を見学したりした。

建設現場を訪れた際、子どもたちは作業着を着た大人を見て、「あの人はきっと大工さんだ」「家を作っているんだ」と話し始めた。そこで保育者が、その人物に職業を尋ねることにした。すると、「私は大工ではなく雨どい屋です。屋根から落ちる雨水を受け止める筒を取り付ける仕事をしています」と説明があった。

子どもたちは、おうちづくりに関わる職業に他にも種類があることを知って驚き、「知らなかった」「雨どいってどれ？」と新たな疑問を抱いた。その後は「私の家にも雨どいあるかな?」「あ、雨どいあったよ」と、自分や他のおうちを観察しながら雨どいを探す姿が見られた。(令和5年9月)

ソーラーパネルが設置されている屋根



散歩先で出会った雨どい屋



〈考察〉

この時期、子どもたちの探究活動は大いに盛り上がり、子どもたち同士の会話は「設計士は設計図を書く仕事なんだよね」「この工事現場、内装工事やっているんじゃない?」「E ちゃんのお母さんはインテリアプランナーだね」などと専門的な言葉が飛び交っていた。また、子どもたち一人ひとりがおうちというジャンルのなかの様々な方向に興味を持っていた。保育者はサークルタイムで子どもたちの興味や疑問をひきだし、「じゃあ明日工事現場に見に行ったら確かめてみようよ」と疑問を確かめる活動を提案したり、「保育園の設計図ってあるのかな?」と保育者も子どもが持った疑問に対して更なる疑問を言葉にしていっていった。

子どもたちの興味のあることについてサークルタイムで対話したり、実際に確かめることのできる環境を素早く提示していったことで子どもたちは心を揺れ動かし続けたのだと考える。

○「自分たちが入れるおうちを作りたい」

子どもたちは、おうちづくりに携わる仕事をきっかけに、おうちに関するさまざまなことへと関心を広げていった。そして“もっと知りたいこと”“自分でやってみたいこと”について対話を重ねるなかで、「自分たちが入れるおうちを作りたい」と話す子どもが多くなっていった。

おうちづくりに関する探究を進める中で、子どもたちは、家が完成するまでには多くの人が関わり、それぞれの専門的な役割によって成り立っていることを知った。こうした理解を通して、「自分でおうちを作ってみよう」という気持ちが芽生えたのである。(令和5年10月)

自分たちの入れるお家を作ることが決まり、保育者は子どもたち一人ひとりに「どんなおうちにしたい?」「おうちづくりするときにどんなことが楽しみ?」と聞いてみることにした。

すると、子どもたち一人ひとりが心に残っている部分や興味を持っている部分が異なっていることに気が付いた。「ぼくは大工さんみたいにドリルをつかってネジをつけてみたい」「お母さん（設計士）みたいに図面を描いてみたい」「屋根をお菓子のおうちみたいにしたい」「おうちができたらみんなでパーティーしたい」と様々な意見がでてきた。その子の保護者が設計に携わる仕事をしていたり、大工の道具に興味を持ち、道具図鑑をよく読んでいたり、一人ひとりがその発言をすることに納得できるような背景や理由があり、そんな子どもたちの「やってみたい」という想いを大切にしたいと考えた。

そこで、各々が興味を持っていることができるように、子どもたちに対する保育者のねらいも合わせておうちに関係する仕事にちなんだ5つのチーム（建築、監督、内装、大工、家具）をつくった。

〈考察〉

子どもたち一人ひとりに「どんなおうちにしたい？」「おうちづくりするときにどんなことが楽しみ？」と問いかけた時に、一人ひとりの興味関心が異なることに驚くと共に、面白さを感じた。同じ経験をしていても、惹かれたり心動いたりする場面は異なっていたのだ。日々のサークルタイムでは、大人1人に対して、15人の子どもと一斉にやりとりを行うことが多い。このように一人ひとりの言葉に耳を傾け、一人ひとりの心の動きを理解していくことは重要であると考えた。

○実際におうちを作るにあたって、共通のイメージを持つ

子どもたちは“自分たちが入れるお家を作る”という目的が決まったことで、実現したいことや、おうちを作ることに対して期待感を持っていた。「窓をつけたい」「お風呂もあったらいいよね」「虫が出るおちは嫌だな」と子ども同士で話す様子も見られた。しかし、子どもたちの持っていたおうちの完成像はバラバラであり、具体的なイメージは定まっていなかった。

そこで、具体的にどのくらいの大きさでどんな形のものを作るのかを、子どもたち同士が共通のイメージを持てるように、ドリームログという大きな積み木を用いて実際に簡易的なおうちを作ってみることにした。（令和5年10月）

子どもたちは、期待感に満ち溢れた表情で各々がドリームログを組み立てていく。しかし、仲の良い子の2人組や一人で家を作ろうとする子がいたことで、ドリームログはすぐに足りなくなり、取り合いの喧嘩が始まった。その場に中途半端に組まれた壁や柱が何個も出来上がっていた。保育者は「一人ひとりがおうちを作ろうとすると、おうちが何個もできちゃうね」とつぶやくと、「みんなで一つのおうちを作ろう」とHちゃんが話し、もう一度最初からおうちづくりが始まった。



一人ひとりと対話をする



おうちづくりについてのウェブマップ



各々が自由におうちをつくる様子

「ここにつなげよう」と H ちゃんがリーダーシップをとり、みんなで 1 つのおうちを完成させることが出来た。しかし、完成したのは入り口のないお風呂のようなおうち。子どもたちはおうちを跨ぎながら「窓も作りたかったのに」「これじゃあ入る時に転びそう」と話し、納得していない様子だった。

すると、部屋の仕切りとして大人が組んだドリームログを見つけた J 君が「長いのと短いのを使えばいいんだ」と話した。

その言葉をきっかけに子どもたちは J 君の指示に耳を傾けながら、3 度目の挑戦を始めた。子どもたちは、「ここ押さええてくれる?」「次はどれ使う?」と先ほどよりもコミュニケーションを多くとっていた。失敗を経たことで、直感的に作るのではなく、“どうしたらいいのだろう?”と考えたり、何度も組み直して試行錯誤したりする様子があった。

そして完成したおうちには、入り口も窓もあった。子どもたちは納得したようで「おうちができあがった」と話し、何度もおうちを出入りしては、おうちを眺めていた。その時の子どもたちの表情は達成感に満ち溢れていた。

窓も入り口もないおうち



部屋の仕切りからヒントを得る



コミュニケーションが増え、役割分担することで納得出来るおうちが完成

〈考察〉

子どもたちが実際に自分たちでおうちを作ろうとし、失敗したからこそ、思考したり、他者の言葉に耳を傾けたりしたと考える。この出来事から保育において子どもたちが失敗の経験をする事は重要だと感じた。失敗しても諦めずに“なんで失敗したのか?”“どうしたら上手くいくだろう?”と試行錯誤する行為は、大人になっても生きていく力として必要だ。さらに、その失敗を乗り越えた後の成功体験は大きな達成感を得ることが出来る。次の課題を乗り越える力にもつながると考えた。

○おうちづくりをする人におうちの作り方を聞く

子どもたちのおうちのイメージが具体化したことで、共通の完成像を持てるようになった。次に、実際にどのようにおうちを作っていくのかを決めるため、専門家をゲストとして招いたり、関連する機関を訪問したりする計画を立てた。おうちづくりに関わる人や場所に出会うことで、子どもたちは自分たちでおうちを作るための具体的なアドバイスを得ることとなった。(令和5年10月～11月)

〈保育園を建てた大工の O さん〉

当園を建てた時に携わっていた大工の O さんを園に招き、園を建てた時の話を聞くと共に、一般的なおうちの建て方について聞いた。子どもたちと大工に聞いてみたいことの質問を事前に話し合い、質問することで、自分たちで家を作るためのヒントを得た。

「保育園を作るのにどのくらいの時間がかかったの?」「木をつるつるにするにはどうしたらいいの?」「ドアはどうやって作るの?」「家づくりにはどんな木を使ったらいいいの?」「おうちを組み立てるときにはどんな道具を使うの?」など子どもたちは自分たちでおうちを建てるための具体的な質問をしていった。

O さんは一人一人の質問に丁寧に答えてくれた。また、答えに対してさらに子どもたちは思考を重ね、さらに質問したり、実際の設計図や道具の写真を見て、どうやって自分たちでおうちを作るのかイメージしようとしていた。



O さんに質問する子どもたち



設計図を見る様子

〈考察〉

子どもたちと考えた大工への質問には、子どもらしい発想があふれており、興味深いものが多かった。例えば、「おうちって地面の上にあるの?ボンドでつけているの?それともグルーガンでつけているの?」という質問である。

大人はさまざまな経験から、建物の下には見えていなくても骨組みや柱があることを想像できる。しかし、段ボールでドールハウスを作った経験を持つ子どもたちにとって、「おうちが地面から動かないのはなぜだろう?」「何でくっつけているのだろうか?」と疑問を抱くことはごく自然なことである。

このことから、大人が“あたりまえ”と考えたまま保育を進めてしまうと、子どもたちの素朴な疑問や気づきを有耶無耶にしてしまう可能性があることが分かった。

〈保育園を設計した建築士の I さん〉

子どもたちは、保育園の設計図を見たことで、設計図に設計を担当した会社や建築士の名前が記されていることに気が付いた。そこから、子どもたちと共に会社や建築士の方をインターネットで調べた。すると、保育園を設計した I さんについてや、電話番号が判明した。

子どもたちは建築士の I さんに興味を持ち、「会ってみたい」「どんなお仕事をしているか見たい」「保育園を作ってくれてありがとうと伝えたい」と話した。

I さんに、子どもたちのこれまでの探究活動の様子を伝え、会いたいと相談したところ、遠方から来てくれることが決まった。

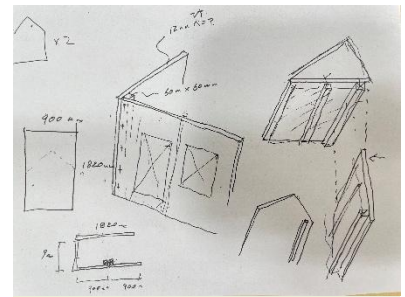
当園をどんな思いで設計したかの話や、子どもたちがドリームログで作った家には屋根がないことをから、屋根を作るにあたってのアドバイスをしてくれた。屋根が三角形でできているのは三角形が一番頑丈な形だからであると、図形のパズルを用いて教えてくれた。また、子どもたちが以前作ったドリームログのおうちを基に三角形の屋根のついた家の設計図を描いてくれた。



Iさんの資料を見る子どもたち



頑丈な三角形で実験をする



設計図

〈建築士の保護者 S さん〉

おうちづくりの活動が活発になってきたことで、他クラスの保護者も子どもたちの探究に興味を持つことが増えた。

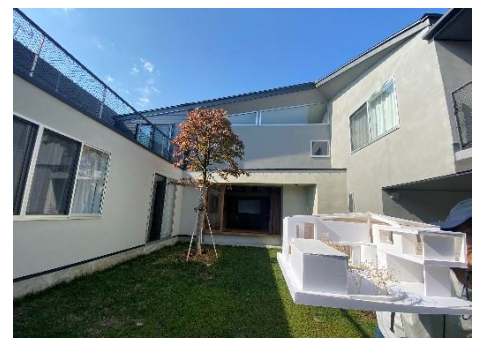
2歳児クラス在籍のS君の両親は建築士で、おうちに関する活動に興味を持ったようだった。「よろしければ、私たちの作った模型と、模型を基に作った家を見に来てください」と話し、模型を子どもたちに貸してくれた。子どもたちは初めて見るおうちの模型に興味津々で、様々な角度から覗き込んで、「ここに部屋があるね」「ここは階段がある」「でも小さい。ハムスター用の家みたい」などと発見を言葉にしていった。

後日、Sさんの家に子どもたちと訪問し、模型とおうちを見比べた。また、おうちづくりの工程について、おうちを設計する時に大切にしていること、設計図や模型の作り方についての話を聞いた。

園に戻ってから、先日建築士のIさんが描いた設計図を基に子どもたちと模型を作った。設計図では平面だったおうちが立体になることで子どもたちのおうちに対するイメージはより鮮明になった。



模型を観察する



模型を基に作った実際の家



説明をする S さん



設計図を基に模型を作る



〈住宅展示場への訪問〉

インテリアコーディネートの仕事をしている保護者の K さんが好意で住宅展示場に連絡を取ってくださり、子どもたちがモデルルームを見学できることになった。

モデルルームでは、各部屋の説明を受けたり、壁の中の断熱構造や内装・外装工事についての話を聞いたりした。子どもたちは実際に目で見て触れることで、おうちづくりに関する知識を深めていった。

また、子どもたちは事前に考えていた質問を職員に投げかけた。「このおうちはいくらですか？」「万円くらい？」「おうちに電気はどうやってついているの？」「クローゼットはどうやってつけるの？」など、多くの具体的な疑問が出された。そのなかで「おうちづくりに大切なことはなんですか？」という質問に対し、職員からは次のような答えがあった。

「おうちづくりには、さまざまな仕事関わっています。たくさんの方が協力することが大切です。みんなもおうちを作る時には、協力してがんばってください。」この言葉をきっかけに、子どもたちは“協力”を意識し始めた。



壁の中の構造やおうちを作る工程の説明を受ける



質問をする様子

〈考察〉

この「協力」というキーワードは、保育者が掲げていた“協同性を育む”というねらいにも合致すると考えられた。当時の子どもたちは、自分の意見を強く主張する一方で、友だちと衝突することが多く、他者と自分を比べて「〇〇ちゃんは～ができないよね」といった発言をする姿も見られた。また、興味のある活動には積極的に取り組むものの、関心のない作業に対しては「遊んでいるから、できあがったら呼んで」と言う子もいた。

そこで保育者は、このおうちづくりプロジェクトを通して、子どもたちが自分と他者の違いに気づき、その違いを受け入れながら仲間と協力する経験を積むことを目指した。

○友だちと協力しておうちを作る

おうちづくりの専門家から聞いたり、実際に見たりした経験から、本格的に子どもたちのおうちづくりが始まった。（令和5年11月～令和6年1月）

〈やすりがけ〉

大工の O さんから聞いた「おうちづくりには雨に強い杉かヒノキの木材を使うと良い」「木をつるつるにするにはやすりがけをすると良い」という言葉を基に、おうち型に切った板と紙やすりを用意した。そして、チームに分かれて紙やすりでやすりがけをしていった。

しかし、木材すべての場所をつるつるにするには時間がかかり、「おうちづくりって疲れるね」と呟きながら

子どもたちはおうちづくりの大変さを実感しているようだった。

そんななか、監督チームの S ちゃんが「もうやめたい」と話した。保育者が理由を尋ねると、「何回やってもガサガサのままで、つるつるにするのが疲れるから」と答え、その場から離れてしまった。この日、S ちゃんはやすりがけ前の板に手を擦り、掌にトゲが刺さってしまったこともあり、気持ちが落ち込んでいた。N ちゃんと Y ちゃんは、心配そうにその様子を見ていた。

そこで保育者は、木の側面のやすりがけを S ちゃんに提案した。側面は幅が狭いため、数回やすりがけをするとつるつるになりやすく、達成感を得られると考えたからである。保育者が実際に目の前でやすりをかけて見せ、S ちゃんに確かめるよう促すと、S ちゃんは「私、端っこ（側面）担当になる」と話し、再び作業を始めた。

心配していた N ちゃんと Y ちゃんは安心したように「心配してたよ」「どうしたの?」と声をかけた。保育者が経緯を説明し、「S ちゃんが戻ってきてどう思った?」と尋ねると、二人は「嬉しかった」と答えた。その言葉を聞いて S ちゃんは恥ずかしそうに笑い、再び仲間と一緒にやすりがけに取り組んだ。

翌日、N ちゃんはやすりがけが得意な S 君から学んだ方法を S ちゃんに伝えた。「こうやって紙やすりを指に巻き付けると、あまり疲れないんだって」と教えると、S ちゃんも工夫を取り入れていた。この後、S ちゃんがチームの活動から離れることは無くなった。

このようにして子どもたちは、おうちづくりを通して“協力”を実践し始めていた。

やすりがけはその後 1 週間続き、毎日取り組んだことで木材はどこを触っても棘が刺さらない、つるつるとした仕上がりになった。



やすりがけをする様子



側面を担当する S ちゃん

〈組み立て〉

定規やインパクトドライバーなどの専用道具を用いながらおうちの組み立てを行った。組み立て作業では、重い木材を押さえたり運んだりする場面があり、子どもたちは「みんなで協力しよう」と声をかけ合いながら力を合わせた。その過程で、子どもたちは協力することの大切さや手応えを実感していた。

監督チームの子どもたちが、専用の T 定規や L 字定規を使ってどこにビスを打つのか目印を描いていった。その目印をもとに大工チームの子どもたちがインパクトを使ってビスを打っていく。ビス打ちに使うインパクトは以前大工の O さんから見せてもらった時から、子どもたちの憧れだった。保育者は「おうちにネジをつけてみたい」「ドリルを使ってみたい」と話していた子を大工チームに選んでいた。



L 定規で目印を描く

保育者はあえて緊張した様子の R 君を最初に指名し、インパクトドライバーを使ってみることを提案した。R 君は了承したものの、自信の無い様子で「できない、できない」と小さな声で呟いていた。保育者は、危険のないように手を添え応援の言葉がけをした。R 君が勇気を出して指に力を込めると、大きな音と共にビスは木材に打ち込まれた。成功したことに気が付くと、安心感から R 君はほっと肩の力を抜いた。すると、同じチームの S 君に腕を揺らされながら「R 君すごい」と言われた。その瞬間 R 君は笑顔になった。これをきっかけに自信のついた R 君は、その後のインパクトドライバーを使う機会には「一番にやりたい」「インパクトの大きい音も平気だよ」と話し、積極的におうちづくりに参加する様子が増えていった。



インパクトの音に耳を抑える



「すごい」と言われ笑顔の R 君



自信を持った R 君

〈話し合い〉

おうちづくりの作業が進むと共に、子どもたちとサークルタイムにておうちに関する対話の時間を多くとっていた。なぜならば、意見の食い違いから喧嘩が多くなっていたからである。例えば、「家の色は絶対にピンクがいい」と話した子に対して「私は絶対に水色がいい」と異なった意見が出て、互いに譲らない様子があった。

そこで、子どもたちと“自分だけが好きなおうちではなくみんなが好きなおうちをつくる”と決め、建築チームと内装チームは、そのスローガンを基に、話し合いを重ねた。

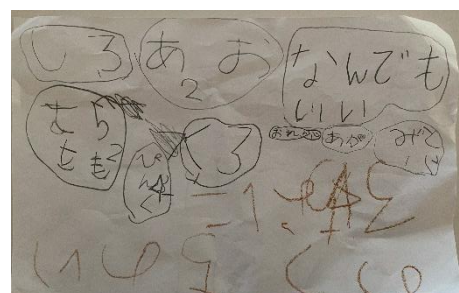


サークルタイムの様子

〈外装工事〉

「設計図を描いてみたい」「どんなおうちにすることを決めたい」と話していた子が属していた建築チーム。おうちをどんな色にするかを決めるとなると、子どもたちは、どうしたらいいのかわからず、なかなか色が決まらなかった。しかし、Y ちゃんの「みんなが好きな色を全部つかいたい」という、温かい言葉をきっかけに、みんなに家を何色で塗りたいかを聞くことになった。すると、8 色程の多くの候補が出たことで、建築チームの子どもたちはさらにどうしたらいいか悩んでしまった。

「みんなが好きな家にするにはどうしよう?」「全部の色を混ぜたらいいのかな」「そうしたら変な色になっちゃうかも」「みんなの好きな色、全部使えなくなっちゃうかも」と、建築チームの子どもたちは様々な考えと心配事を話した。そこで、保育者が“塗る”にこだわらずに模様にも出来ることと話す、と、「レインボーにしたらいいんだ」と H ちゃんが話し、どうしたら全員の好きな色を全て使えるかのアイデアが出始めた。結果、水玉模様にすることが決まった。



色の聞き取りをした子どものメモ



おうちの模様を考える様子



みんなの前でアイデアを発表する建築チーム



その後、A ちゃんが「私、上手に丸が描けないから心配」と話したことをきっかけに、アート活動の講師として園に来ていた M さんに、きれいに丸を描く方法を尋ねた。M さんから「丸型にくり抜いた型紙を使うときれいな丸になるよ」というアドバイスを受け、型紙を準備した。

建築チームの子どもたちからは「丸の大きさは大きいのも小さいのもほしい」「丸と丸が重なっているのもかわいい」といった意見が出された。そして、丸が重なる場所を作るため、塗る作業を 2 回に分けて行った。最初は心配事ばかりを口にしていただけの子どもたちだったが、心配事を話しては解消していく経験を重ねることで、見通しを持てる安心感や、少しずつ自信を得る姿が見られた。

さらに、アイデアをみんなの前で発表すると、それを聞いた他チームの N ちゃんが「建築チームが私たちの好きな色を全部使ってくれたのが嬉しい」と話した。それを受けてレインボーにすることを思いついた H ちゃんは「なんだか、N ちゃんにそう言うてくれてありがとうって言いたくなってきた」と話した。

実は H ちゃんは、おうちづくりを始める前から「おうちは全体にピンクがいい」とこだわりを持っていた。しかし、この経験を通して、相手の意見を聞き入れ、受け入れることで感謝されたり、お互いが温かい気持ちになったりすることを学んだのである。



丸の型に合わせて色を塗る様子



水玉模様になったおうち

〈内装工事〉

内装は、設計の仕事をしている保護者からいただいた壁紙のサンプルを使うことになった。内装チームの 3 人は、数多くの壁紙の中からどれを選ぶかを話し合った。E ちゃんは色合いを決めるために、自宅からカラーコーディネート表を印刷して持参していた。そこには、紫＝お洒落・大人っぽい、緑＝爽やか・平和といったように、色ごとの雰囲気やイメージが記されていた。その影響を受け、内装チームは色そのものではなく「雰囲気」に着目するようになった。

E ちゃんが「落ち着いたおうち、大人っぽいおうちとか、どんな雰囲気にしたいのかをみんなに選んでもらうのはどう?」と提案すると、Y 君と S ちゃんも「それいいね」と賛同した。

その後、チームは雰囲気の項目をみんなの前で発表し、一人ひとりの意見を聞いた。



カラーコーディネート表

子どもたちが選んだ雰囲気に合う色合いの壁紙に付箋を貼っていった。さらに、その中からお気に入りの壁紙を一人ずつ選び、内壁となる段ボールに、大工の O さんから教わった壁紙専用の糊を使って丁寧に貼り付けていった。



クロスに付箋をつける



みんなに発表をする内装チーム



内装工事の様子

〈考察〉

おうちづくりを通して、子どもたちはさまざまな経験を重ねた。友だちと喧嘩しながらも自分の気持ちを伝えて分かり合う経験、自信のないことに挑戦して達成感を得る経験、自分のアイデアが友だちに肯定される経験、そして心配なことを一つずつ解消していく経験などである。

子どもたちは失敗や試行錯誤を繰り返し、他者との対話を重ねるなかで、それぞれの興味や得意を活かしながら探究を楽しんだ。そして、“おうちづくり”という共通の目標に向けて協力する姿が次第に増えていった。

このプロジェクトは、子どもたちが共に学び、共に成長していく過程となり、まさに保育者がねらいとしていた“協同性”が育まれる活動となった。

○おうち完成のお祝いと、協力してくれた人に感謝を伝えるパーティーをする

子どもたちは以前から、「おうちが出来上がったらホームパーティーをしたい」と話していた。そこで保育者が「どんなパーティーにしたい?」と問いかけると、子どもたちからは「おうちでホットケーキを食べたい」「みんなで頑張ったからお祝いしたい」「手伝ってくれた人を招待したい」「お礼の手紙を書きたい」といった意見が出された。

このことから、“完成をお祝いすること”と“手伝ってくれた人に感謝を伝えること”をコンセプトとしたパーティーを行うことになった。(令和 6 年 1 月)



完成したおうち



パーティーの飾り



協力者に感謝の手紙を渡す

○おうちづくりの振り返り

おうちの完成後、子どもたちはその中でご飯を食べたり遊んだり、過ごす時間が増えていった。自分たちで作ったおうちは、愛着を持った特別な存在となっていた。一方で、卒園が近づいていたこの時期、子どもたちは小学校進学への期待感を膨らませていた。そのなかで「卒園したらおうちはどうなるの?」と話題にすることが多くなった。そこで保育者は、子どもたちに絵本『みんなのいえ』（文芸堂）を読み聞かせることにした。

その絵本は、住む人のいなくなった寂しい家を旅人が見つけ、仲間と一緒に修理し、自分たちだけの特別な家を作るという物語であった。これまでのおうちづくりと重なる部分があると同時に、卒園後には保育園におうちだけが残されてしまうことを子どもたちに伝えるために、この本を読んだ。

読み終えた後、保育者が「みんなが卒園した後、みんなのおうちはどうなるのだろう?」と問いかけると、子どもたちからは「とっておきたい」「でも小学校に行くからたくさんは来れない」「みんな（他クラスの子）に壊されたら嫌だ」といった言葉があがった。そこで保育者は、「おうちが残っていても私は修理や管理はできないし、みんながいないおうちに一人で入るのは寂しいな」と伝えた。すると、子どもたちはどうしたらよいのか悩み始めた。



絵本を読む様子

保育者は「一度組み立てたおうちをバラバラにして、みんなが持ち帰れる“小さなおうち”にしてはどうか? 小学校に行っても会えなくなっても、協力しておうちを作ったことを思い出せると思うよ」と提案した。

おうちが解体されることに寂しさを感じる子もいた。しかし、卒園後に子どもたちの手を離れ、いつのまにか壊れたり、管理されず物置きになったり、忘れ去られて捨てられてしまえば、絵本に出てきた「住む人のいない寂しい家」と同じになってしまうかもしれないと伝えると、「それはもっと悲しい」と子どもたちは話し、解体することに納得した。

解体が決まってからは、家具チームと共に“小さなおうち”の家具を作り、一人ひとりが自分のおうちにやすりがけを行った。子どもたちは作業の中で「やすりがけは慣れてるから、もうすぐにつるつるになっちゃった」「やすりがけをしないとザラザラで手に棘が刺さったよね」「この色は Y 君が選んだ色だね」などと振り返りながら言葉を交わし、自分たちの成長や学びを実感しているようだった。

そこで保育者はサークルタイムで、「どんなことがわかった?」「どんなことができるようになった?」と問いかけながら、おうちづくりで得た知識や発見を振り返り、絵本を作成した。この“小さなおうち”と絵本は、卒園製作として子どもたち一人ひとりが持ち帰ることになった。（令和 6 年 3 月）



鋸で家具を作る家具チーム



振り返りながら作った絵本



完成した“小さなおうち”

Ⅲ.まとめ

○保育者が意識したこと、考察

〈子どもたちのありのままの心の動きや経験を大切にする。〉

保育者はねらいを持ち、予測しながら保育を進めていたが、実際には予想外の出来事が多く起こった。時には「こうした方が上手くいくのに」と答えを伝えたくなくなったり、予測通りに進むように誘導したくなる場面もあった。しかし、今回の実践を通して、予想外の展開や大人の想定を超える瞬間こそ、子どもたちにとって新たな発見や学びにつながる事がわかった。子どもたちが自らの手ごたえを得られるよう、保育者は先回りせず、その時々のあるままの心の動きを受け止めることが重要であると感じた。

〈大人も科学する心を持ち続ける。〉

今回の“おうち”というテーマは保育者も知らないことが多くあった。そこで専門家や保護者を巻き込み、子どもたちと共に学んでいくなかで、子どもたちは社会に触れ、疑問を抱き、気づきや学びを得る経験をしていった。また、大人も子供と同じように疑問を抱き、学びを得ていたのである。

子どもたちに関わる大人も大きな人的環境である。子どもたちと共に驚き、共に感動することは、子どもたちにとっても大きな影響となったと考える。また、保育という観点でも、保育者は子どもたちと関わりながら、時には失敗を経て振り返ったり、試行錯誤したりする経験をする事で得ていった学びが多くある。子どもも大人も共に育っていているのを感じた。科学する心は子どもだけでなく、大人も持ち続けていくことが重要である。

○考察に基づく課題と今後の方向性や計画

5歳児だったこともあり、卒園が近づくにつれて保育者が探究の的を絞る場面もあった。しかし、もしのきを絞らずに子どもたちの自由でありのままの発想を追っていれば、思いがけない方向に探究が深まっていた可能性も大いにある。“自分たちでおうちをつくる”という子どもたちとの共通の目的と、保育者としてのねらいや想い、そして子ども一人ひとりの興味や願い、そのすべてのバランスを取る事の難しさを実感した。

今回は5歳児と共に“おうち”をテーマに保育を進めていったが、他クラスの子どもが5歳児のおうちづくりに憧れを抱く姿や、このテーマに限らず他の遊びが盛り上がる様子も多く見られた。

年齢やテーマにかかわらず、日々の生活や遊びのなかには誰もが科学する心を揺れ動かす機会がある。乳幼児期という原体験を積み重ねる大切な時期に関わる保育者は、その科学する心のきっかけを掴み取り、子どもたちがのびのびと探究し続けられる環境を保障する存在でありたいと考える。

〈参考文献〉

青木一永(2022)『3 ステップの視点で保育が楽しくなる!つなげる保育スタート BOOK』東洋館出版社
〈研究代表・執筆者〉

梅影 美沙乃